

とく
徳

ほう
朋

「悪人」であることへの目覚め

中川 皓三郎



なかがわ こうざぶろう

1943－2020

大阪府生まれ。元帯広大
谷短期大学学長。元真宗
大谷派林松寺宗徒

『歎異抄』に「悪人成仏」という言葉がありますが、親鸞聖人は、悪人こそがもつとも人間らしい人間になることができるんだと言うのです。普通に考えたら何を言っているのかと言う話ですが、悪人だということは、何か人の物を盗ったとか、そういうことではなしに、この「私」を前提にして生きるという事です。

その私を前提にして生きているということは、先ほど凡夫という言葉で確かめたように、自分の思いに合うものは受け入れる事ができるけれど、思いに合わないものは受け入れる事ができないと。そういうことで生きているために、自分を傷つけ、人を傷つけている。そのことを教えられて、本当に申し訳なかったと頭が下がったものを悪人というのです。

なぜ念仏なのか。それは、われわれがみんな自分中心のころというものを決して捨てる事ができない、そのことがまずなぜに対する受け止めであろうかと思います。

そしてお釈迦さまは何に目覚めて仏陀になられたか。それは、もともと初めから、われわれはみんな個性豊かに生きているという「縁起の法」です。どんないのちも皆、生きる事のできるいのちなんだ。そのいのちに目覚めて生きるものになりなさいと、こういう呼びかけが「南無

あみだぶつ
阿弥陀仏」と、念仏しなさいということなんだと。

そのことがどこでわかるかと言え、われわれ一人ひとりが、自分で悪人であるということ
を教えられてわかり、そのことによって、申し訳なかったと頭が下がる。頭が下がったところ
に、初めてお互いにみんなきょうだいであるということを知られてわかる。

ですから、「南無阿弥陀仏」の呼び掛けのもと、きょうだいとして生きていこうと。それが
浄土真宗ということで教えられているのです。そういう人生を生きるところに、われわれ自身
が本当に仏になっていく、人間らしい人間になっていくということが開かれるということなの
です。

そういうことが、人間として生まれたわれわれ一人ひとりの大きな課題なのです。そのこと
だけをどうか受け止めていただいて、学んでいっていただけたらと思うことです。

(『人間で在ることの課題』)



この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして
毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

